

---

# 騎士団付魔術師のお話

お仕事サボって

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

騎士団付魔術師のお話

### 【Nコード】

N8974F

### 【作者名】

お仕事サボって

### 【あらすじ】

魔法有りの中世欧州風異世界で、文官系の魔術師が武官系の騎士団に配属となってしまう、苦勞の末に．．．どうなるんだろう．．．というお話です。

## ぶろろおぐ(前書き)

初めての執筆なのでいろいろと勘弁してください。

## ぶろろおぐ

僕が10歳の時に王都の魔法学校に入学してより5年、先週ついに僕の就職先が決まったことで魔法学校の卒業も決まった。

普通の農民の子である僕が学校に行くことができたのも、僕が魔術師になることができる程の魔力を持っていたからで、特待生として月々のお小遣いすら支給されて来た身としては、当然の如く学校側が用意した就職先を断ることなど考えられない。

僕の名前はエリン。

このクレバール王国で3番目に大きな都市であるリープス侯爵領の騎士団、紅蓮の獅子騎士団に就職する事となった新米魔術師である。

領主様のお城に着いた僕は騎士団の詰め所に任官の挨拶に向かう訳だが、この領内には騎士団が3つ在るはずなので何処に僕の所属する紅蓮の獅子騎士団の団長室があるか判らない。

そこで詰所の入り口にタムロしていた5、6人の騎士らしき方々に声を掛けてみた。

「あ、あの... すいません」

へたれですまないが、彼らは怖いのだ。

さすがに戦場を駆ける戦士達だけあって普通にしているも怖いのだが、僕が声を掛けた瞬間。

「あゝ！？ 何者だ？ テメエ」

と来たのである。

襟首を掴んで鼻がひつつきそうな近距離からメンチを切って「何処のモンよ」てなものである。

お小水を漏らさなかつた僕は勇気がある部類だと思つ。

「あの、自分は、この度 紅蓮の獅子騎士団 に配属に．．．」

「あゝ！？ ヤキネコだと？ テメエ」

後から知つた話だが、ヤキネコとは 紅蓮の獅子騎士団 の団旗が炎の鬘たてがみを身に纏つた赤いライオンであることからの擲擄やゆで、領内の3騎士団はそれぞれ非常に仲が悪い為<sup>に</sup>他の騎士団からはこの様な卑称で呼ばれているとの事だ。

しかし、今のピンチには何の慰めにもならない。

「テムツ！オレ等が 幻影の剣騎士団 って事、判つてのセリフだろうな！」

判つてないに決まっている。

でも、そんな事言える訳ないので謝るしかないかな．．．とか思っている。

「シーン、待てよ」

僕の襟首を捕まえてる（シーンさんと言つらしい）人の連れの一人が待つたを掛けてくれた。

「おうボウズ！ お前はまだヤキネコの頭に会つてねえんだろ？．．

．．だつたらまだ一般バンピ人だあ」

シーンさんは割つて入つてくれた人を一瞥いちべつした後に「チツ」と舌打ちして放してくれた。

何とか助かつたようだ。

「ヤキネコはあつちの建物だあ」

「あ、ありがとうございます」

僕は助けてくれた上に 紅蓮の獅子騎士団 の建物だろう場所を教えしてくれた人にお礼を言つたが。

「忘れるなよお、次に会つた時はオメエもヤキネコだあ」

と、怖い笑顔で冷笑わらわれてしまった。

教えられた建物になんとか入つてみると。

「あゝ！？」

今度は中に居た10人以上の騎士の皆様方にメンチを切られてしまった。

カンベンしてください。

## ぶろろおぐ(後書き)

完成するまで続けることができればいいなあと思いつつ、拙い処は  
ご勘弁を

## 第一話

無事に団長への挨拶を終えた僕は鍛錬場で 紅蓮の獅子騎士団 の面々に紹介されていた。

「今日から騎士団付魔術師としてウチに配属になったエリンだ！

みんなヨロシクウ」

「ヨロシクウ！！」

団長に紹介されて宜しくって返されたんだけど、脳内で 世露死苦 に変換されてしまうのは気のせいだろうか。

「エ、エリンです。宜しくお願いします。」

僕は緊張しつつも挨拶してみたが、どうも皆さんの目はキビシイ感じがする。

それも判らない事ではなく、15歳の僕が位階では騎士と同格とされる魔術師だからだ。

通常騎士になるには10歳になる前から従者として騎士団の小間使 的な位置で修行する。

14〜15歳になって漸く従士として戦いに参加する事が許される。ここまでは多少の能力による差は有っても大体同じように上がって いく訳だが、騎士になるといふ事になると貴族の子供で18歳以上 から、下級貴族（騎士や貴族の臣など）の子供で24歳以上からが 一般的で、優秀な人材であれば14歳で従士になった後15歳で騎 士になる人もいるが、逆に30歳を過ぎても従士のままという人も いる。

つまり僕は15歳で横から騎士団に入って来たにも関わらず、騎士 団でも最優秀な人達と同じ扱いを受けていると言うことなのだ。

騎士団の中でも騎士は 1 / 4 に満たない数で、僕より下の立場になる従士の皆さんは基本的に貴族か下級貴族の子弟というところも彼らの視線が鋭くなっている一因かもしれない。

騎士と同等の数がいる騎士団付神官戦士の皆さんは従士と同格で基本的に平民出身だが、神殿の勢力がバツクに付いているので貴族とは違う階級意識ヒエラルキーを持っている。

こういった中で皆さんが僕に向ける目から コイツナニモノヨ とか ジュウシナメンナヨ とか コゾウガハネテルトンジマウゾ とかの声が聞こえそうなのは僕の被害妄想だろうか。

重く押し掛かる空気の中、団長の解散の合図と共に通常訓練に戻る団員達に一息つきつつ先達の騎士団付魔術師達の元へ向かった。

団長は「最初は取っ付き憎いかもしれんが、皆いいやつらだから心配するな」とか言ってたけど、とてもそうは思えない。

何しろ団員の大半が（神官戦士達まで）やたらと尖がったりリーゼントに鬼剃りを入れていたりパンチパーマだったり「いいやつら」を真っ向から否定するようなナニカに突き動かされた格好をしているのだから。

実際、団長自体が深めの剃りが入った角刈りというちょっとアレな髪型なのだから、文官系と武官系の溝というか認識の差異というか「いいやつら」の基準が違ったらしいことはおぼろげに認識できる。

処で先達の魔術師達だが、紅蓮（団員達は 紅蓮の獅子騎士団 を自称するときこの呼び方を好むらしい）には3人の魔術師がいる。

一人目はファーレン老と言って頭は禿げあがっているが腰の下まで届く白髪の見事な鬚が特徴の老人だ。

彼は最年長だけあって魔術師達の中心的立場にいる。 好々爺と言った印象で、若い従士や従卒からはファー爺などと呼ばれている。

二人目は40代のマツチヨ男でメイガスという。本来文官系の魔術師がはち切れんばかりの筋肉を誇っているのは騎士団付という役職の為、とは他の二人を見ると思えないのだが、案外あの筋肉故にこそ騎士団付となったのかもしれない。

三人目は20代の後半で、ウェイーン・リースと言って領主様の縁戚に当たる人物だ。

実際にはファールン老もメイガスさんも貴族の家系なので家名はもっているのだが、最初の自己紹介では家名までは言わなかった。

逆にリースの家名を強調するように名乗ったウェイーンさんは選民意識が透けて見えるが、貴族階級の多い魔術師には少なからずいるタイプなので慣れているとも言える。

瘦せぎすの如何にもな魔術師である。

ちなみに僕は中肉中背の凡庸な、とも言える体系で、年齢以上に若い顔立ちをしているので騎士団のような武官系の人たちには余計になめられるかもしれない。

ともあれ、しばらくは先達に従って騎士団にとって有効な魔術を学ぶ事になるようだ。

これは既知の魔術を集団戦においてどの様な時にどの様な術が有効か学ぶという意味と、魔法学校では学ばなかった新しい魔術を学ぶという2つの意味がある。

特に新しい魔術に関しては、戦場以外では使う頻度が低いので教わらなかつた魔術や、騎士団独自の魔術（何処の騎士団も自分たちの切り札として門外不出の魔術を持つ）を学ぶ事ができるのでうれしい。

勿論、魔術の勉強だけが僕の仕事ではない。

騎士団に来て3日が経った日の事、騎士のアルバートさんに領内の巡回に付いてくる様に言われた。

巡回は騎士4名（騎士1名毎に1名の神官戦士と従士2名が付いて1組となる）で行い、16名+僕で領内の決まったコースを馬で走って行く。

アルバートさんが今回の組のリーダーだ。

「今日の巡回は西門廻りのセス村からオプリ村流して行くから！ヨロシクウ！」

「ヨロシクウ！！」

「後、今回はエリン坊のデビューだからあ！一応喧嘩ナシってことでえ！」

エリン坊って．．．いやいやそれより喧嘩ナシって、普段はアルの？頭に一応が付いてるのも怖いけど。

「お前ら 幻影の剣<sup>ナマクラ</sup> や 天狼<sup>イヌ</sup> 共と力チあってもイキナシ突ッ<sup>ツ</sup>込むんじゃねーぞッ！」

幻影の剣騎士団 はこの間の騎士団で、 天狼騎士団 も領内の騎士団だよな。

何でこんなに仲悪いんだろう。

「じゃあ出発<sup>デッパッ</sup>すつからあ！」

いきなり凄い速度で駆け抜ける騎士達、僕の馬も勝手に走ってるけど、僕は馬にしがみついているので精一杯だ。

他の騎士達は従士達も含めて余裕な顔してるし、無駄に大きな団旗をはためかせている従士もいる。

西門を通り過ぎる頃には慣れない馬の駆け足で体中がビリビリ痺れているようだった。

こんな速度じゃ持たないから少し止まって休憩して欲しい。

．．．そんな風に思っていた時期が僕にもありました。

急に疾走していた騎士たちの馬が停止したので、僕も慌てて馬を止めると前方に30人程の人影が。

よく見ると初日に僕の首を絞めたシーンさんが居る。

つまりは 幻影の剣騎士団 だよな、この人達。

「コラッ！ナマクラ共オ！邪魔だろうがあ！」

アルバートさん、今日は喧嘩ナシなんじゃあ...

「ヤキネコが上等な口利くじゃねえか... 通りたかったら避けて通んなあ」

幻影の騎士も挑発を返してくるし...

ここまで来ると... て言うか端っから喧嘩上等な両者の間に話し合いの持たれる余地などなさそう。

しかし、相手の人数はこちらの倍って、勝ち目ないんじゃないやあ...

アルバートさん達だけでなく他の面々からも「ッロスぞお！」とか

「テメツ！」とか「くあwse drift gyふじこip」とか... もう止まりそうにない。

そんな事を考えているとすぐ前にこの間 紅蓮 の詰所を教えられた 幻影 の騎士さんが「次に会った時はおまえは敵だヤキネコつつつてたよなあ！」って。

そのままアルバートさんを見て「どうするよおアルバートお！ 今おめえ等はウチの半分だぜえ！」ニタアって感じの笑顔が怖い。

「グリーズう...」へえ、グリーズさんって言うんだ何て考えてると。

「確かにこっちは半分かもしれねーがな！ 魔術師付きだぜえ！？」  
... って僕？ 僕なの？ アルバートさん！

そしていきなり剣を抜き始めたお互いの騎士や従士たち。

僕は少し下がって先日メイガスさんに教えてもらった加速ハイスを唱えた。

この魔法を始めとする戦場用の魔法は剣や鎧などに刻まれている紋章を媒介として味方にのみ魔法の影響を及ぼす事ができるため、使い方を間違えなければ非常に強力な効果を発揮する。

<sup>ヘイスト</sup>加速の影響化にある 紅蓮 の団員は倍の人数を物ともせず3分後には戦いの趨勢は決していた。

尤も、後2分も戦いが続けば僕は魔力を使い果たしていただろうから、実際は結果ほど楽勝ではなかったのだが。

しかし、今回の小競り合いは僕にとっては行幸と言えた。

何しろ先ほどまでは完全にお荷物扱いで、特に魔術の影響化で戦った経験の少ない従士達は完全に僕のことをナメていた節があるのだが、戦いが終わった瞬間から僕に対する見る目が変わったのは間違いない。

何しろ2倍の相手に3分弱で勝つことができたのは間違いなく魔術のおかげであることは言うまでもないことだからだ。

正直、<sup>ヘイスト</sup>加速の魔術がこんなに効果が高いとは思ってなかった。

ええ、僕もナメてました。 魔術師。

「よし！ セス村からオプリ村流し！ 気合入れて行くぞ！ オ  
ラァ」

「オオッス！」

僕の気合は魔力になって8割方消えています・・・

詰所に戻った後はボタンキューでした。

## 第二話

初めての巡回から帰って次の日、朝食を食べに食道に着くと昨日一緒に巡回した従士のブレイブ君達が5〜6人で挨拶しに来た。

「チーッス！ エリンさん！ オハヨウゴザイアス！！」

両膝を軽く曲げて両手を膝の上に乗せた独特の格好（そうすると自然と頭が下がる、あの出迎えスタイルだ）で迎えてくれる。

彼らは朝からテンションが高い。

しかし昨日の朝までは僕の事を半ば無視してた人たちが昨日の一件でこうも変わるとは・・・

尤も殆どの人たちはまだ昨日の一件を知らないか、知っていても静観を決め込んでいるようで、集まってきたブレイブ君達以外はいつも通りである。

「あ、お早うみんな。僕は皆と同世代なんだからそんなに畏まらなくても・・・」

「いやいや、エリンさんはオレ等上司っすから・・・」  
確かに騎士と同格の僕は直属では無いとはいえ彼らの上司に当たるが、同じ年か少し上のブレイブ君達にやり難さを感じないでもない。それとも慣れていくのだろうか。

一通り朝食を食べ終わってブレイブ君達と話していたら騎士のサリファス君に声を掛けられた。

「やあ！エリン君。大活躍だったんだって？」

サリファス君は僕と同じ15歳の騎士で、新進気鋭の呼び声も高くブレイブ君達同年代の従士にとっては出世頭というよりは憧れのスター的な人物だ。

そそくさとサリファス君の為に席を空けるブレイブ君達の行動にそれが滲み出ている。

一応同年代で同格の騎士と魔術師ということだ。タメ口で話してくれて言われてるけど、彼こそ紅蓮の誇るエリート騎士の一人ってことになるだろう。

「サリファス君。活躍と言っても僕は後ろで魔術を使っただけで、実際に戦ったのはアルバートさん達やここにいるブレイブ君達だよ。ちよつと謙遜してみるけど、内心は鼻高々だったのだが。」

「でもアルバートさんには困ったよねーっ。喧嘩はナシって事のハズだったんだけど」

え？ 勝ったからいいのでは？ 等と思っていると。

「いや、ホラさー。紅蓮ウチからすると倍の人数に勝った訳だから問題ないんだけど。幻影ナマクラの奴等から見ると半分の人数に伸されちゃったって事じゃない。治まんないよねー。ヤッパ」

いや、サリファス君。

そんな語尾にハートマークが付きそうな感じで言わなくても．．．でも良く考えたらそうなんだよね。

さすがに同じ御領主様の騎士団同士だから命までは取ってないけど、いや、だからこそ半分の人数にコテンパンにされたグリーンズさん達が黙っているハズがない。

今頃は魔術治癒で大半の人達は復活してるだろうし、本人たちを除けても幻影の騎士団としての体面を考えると．．．

「来るだろうね．．．幻影ナマクラ共が」

ハイ、サリファス君がすごく嬉しそうな顔で保障してくれました。

そんな保障イラナイヨ。

保障が有ろうと無かろうと来るものは来る。

実際、それから一時間後には 幻影 の騎士、それも昨日揉めた若手達じゃなくて30代の一線級の騎士が二人やって来た。

もし来たのが若手の騎士や従士達なら、何十人で来ようと間違いない。紅蓮 の従士や比較的若手の騎士達から嘲笑や恫喝の声が聞こえてきたハズだが、さすがに貫禄が違うという事だろうか、微妙な沈黙の中 幻影 の騎士たちは 紅蓮 の騎士団長室へ消えていった。

尤も僕はその頃ブレイブ君達と厩やまじの方に行っていて馬のお自慢大会などをしていたのだが。

「見てくださいヨ！ エリンさん！ 西方で流行りの貴品種馬にカール工房の鞍でバリツとキメて！」

「っに言ってるんだヨ！ 俺のジレールちゃんハミなんか銜も鞍も口アック工房の最高級品ヨオ！」

「馬具じゃねえーんだよ！ 俺のラツセルは東の汗血馬の流れをくむ……」

皆、自分たちの馬に拘りがあり、馬の話になると時を忘れて話始める。

ちなみにカール工房や口アック工房はこの国の有名な馬具工房である。

ただ、話がヒートアップしてくると偶に喧嘩まで発展することがあるのは勘弁してほしい。

皆のこめかみに血管が浮き始めて、そろそろ血を見ないと治まらないかと思いはじめたころ、アルバートさんとサリファス君がやって来た。

「おう！お前ら、昨日の件で 幻影 ナマクラ 共がゴネて来やがったぜ。」「アルバートさんの一言で話題は一瞬にお馬自慢から 幻影 ナマクラ との喧

嘩の話に変わった。

尤も話のテンションは上がるばかりだが。

「明日の朝双方から代表者を出して一騎討ちだ！」<sup>タイマン</sup>

皆のボルテージが最高に上がっていく。(反対に僕のボルテージは消滅寸前だ。 何で皆こんなに喧嘩好きなんだろう)

「まかせて下さいヨお！ 俺が 幻影<sup>ナマクラ</sup>の奴等なんかギツタギタに

・」<sup>タイマン</sup> ブレイブ君が一騎討ちに立候補するもアルバートさんから待ったがかかった。

「オメーは当事者だからダメだよ！ それに今回は騎士同士の一騎<sup>タイ</sup>討ちだ！」

「え？ それじゃアルバートさんが出るスかあ？」

「タコお！ 俺も当事者だろうがあー！」

ブレイブ君とアルバートさんの掛け合いにサリファス君が割って入った。

「もう俺が出る事に決まってるんだ」

ゴメンねえ。 って感じでブレイブ君達に誤りながら言うけど、実際に 紅蓮 の若手騎士の中では(もちろん従士も含めて)最強と言われるサリファス君が代表として出るなら誰も文句は言わないだろう。

どの騎士団も仲が悪いとはいえ「若いモンが跳ね返ってるだけ」と言うスタンスを崩さないから、各騎士団間のゴタゴタは必要以上に大きくならないでいる。

そう言った意味でも今回僕が関わった、つまりペーパーの騎士や従士だけでなく(実態は兎も角)虎の子的な立場の魔術師が関わったという事で、かなりギリギリのヤバい処まで来ていたらしい。

負けた 幻影 の方が 紅蓮 の巡回コースに陣を張ってた(つまり喧嘩<sup>チャ</sup>るき満々で待ち伏せていた)ということもあって直接的なお

咎めはナシだが、一騎討ちの回避は事実上不可能。<sup>タイムン</sup>

こつと言った事情なので、中堅以上の騎士が代表に出ることはお互い  
にあり得ない。

若手最速コースで騎士になったサリファス君以上の代表はちょっと  
見つからないだろう。

当事者である僕には無責任ほいけど、後はサリファス君を応援する  
しかない。

サリファス君がんばれ！

## 第三話

一騎討ちタイマンの日に集まって来たのは50人位だった。

元々の原因である僕たち（紅蓮 側の17人と 幻影 側の32人）とお互いの代表となる2人。

どうやらその他の人たちは集まる事を許されてないらしい。  
あくまでも一部の若手騎士と従士内でのモメゴトで納めようという事だ。

僕らの代表であるサリファス君が前に出て行くと、相手側からも1名出てきた。

どうやら相手の代表はアルバートさんと同年代、ギリギリ若手と言われる年代のようだ。

「ラーズう．．．」  
隣にいるアルバートさんから絞り込む様な声が聞こえてきた。

相手の名前はラーズさんと言うらしいが、アルバートさんのコワイくらい真剣な眼を見るとやっかいな相手らしい。

「やっかいな相手なんですか？」

アルバートさんに聞いてみると「あゝ？」と感じて一瞥くれた後に解説してくれた。

無駄にコワイです。 ハイ。

「ラーズは俺らン代じゃ一等強エえ奴でな、今の若い奴等じゃサリファスが頭一つ抜けてるが、俺らがペーパーの頃は奴だった。 サリファスと同じで15分時に騎士になって、最近じゃあ若手の者等とつるんで暴走はる事が無くなったと思ってたんだが．．． ここで出てくるかヨ！」

「じゃ、じゃあサリファス君と同じくらい強いって事に・・・」

「そうじゃねえ！ 確かに奴が15分時なら互角・・・いや、サリファスの方が強かったかもしれねえ。だが幾ら強くてもサリファスはまだ15分だ、骨格が出来上がってない。発展途上の強さなんだよ！ それに比べてラーズの野郎は肉体的には今がピーク！ これから先、経験を積んで更に強くはなっていくだろうが、肉体的には既に完成されてる！」

「じゃ、じゃあ勝ち目は・・・」  
「無い！」

そ、そんな、確かに今回の一騎討ち（タイクマン）は 幻影 が名誉回復の為に望んだモノだけど、勝ち目のない戦いなんで・・・

「それだけじゃねえぞ！」

え、まだ何かあるの？

「ウチの領内じゃ騎士団が3つあるのはオマエも知ってるな！ それぞれの騎士団の成り立ちだが、俺ら 紅蓮 は近隣に出没する魔獣を退治する為に出来たのが始まりヨ！ 同じように 天狼 共は町の治安部として出来た！ で 幻影 共だが、奴等は戦争の為に作られた騎士団ヨ！」

モチロン、魔獣退治で設立された 紅蓮 が戦争に参加しない訳じゃないし、 紅蓮 以外に魔獣退治が出来ない訳でもない。

しかし騎士団の設立理由が其々の騎士団の特徴に大きな影響を与えているのは想像に難くない。

つまり、対人戦のエキスパートである 幻影の剣騎士団 で訓練を積んだ年数分だけラーズさんの方が有利と言う事になる。

サリファス君達の方を見ると既に二人が睨み合っている処だった。

「判つてンよなあ！ サリファスう！ 今回ウチあ負ける訳にイかねーからヨー」仕方なく出ているんだと言いたそうなラーズさんはつまらなそうな顔をしながらも強力な眼力でサリファス君を威嚇している。

「知らねえヨ」どうでもイイヨって感じでサリファス君は顔は笑ってるけど眼は笑ってない。

でもかかって来ンなら「潰してヤンよ」って、サリファス君不利なのに実はやる気満々です。

そして次の瞬間、ラーズさんの喉を狙ったサリファス君の剣をラーズさんが払い退けていた。

いきなり必殺狙いのサリファス君も、それを軽く弾くラーズさんも恐すぎる。

辛うじて僕が見えたのは最初のその一撃だけで、後は何がどうなってるか判らないほどの速さで十数回の剣激の音が聞こえて来たかと思ったら、二人ともピタリと止まって、サリファス君の頬に一筋の切り傷が薄く浮かんだ。

やっぱりアルバートさんの言うとおり（よく判らないけど）サリファス君の方が不利みたいだ。

二人の動きが止まるとブレイブ君達 紅蓮 の側も、相手の 幻影 側でも耳が痛い程の静寂が辺りを包む。

始まった当初は威嚇と野次の応酬だったのが嘘みたいな沈黙の中、再び二人が動き出す。

ラーズさんの大上段からの打ち込みを盾で受けたサリファス君が蹴りでラーズさんを吹き飛ばす。

「ぐつ．．．これだから、紅蓮ヤキネコの奴あ．．．」蹴られた腹を押さえてラーズさんが起き上がると、「どおしたあ？ ラーズさんよお？ お上品な訓練けいこばつかで喧嘩のしかたも忘れちまつたかヨお！  
だから 幻影ナマクラ って言われんだよオ」サリファス君が挑発を掛ける。

「確かに戦争時を想定した 幻影ナマクラ の訓練じゃあ足技なんざ使わねえよな」アルバートさんが解説してくれる「俺ら是对魔獣を想定した訓練が主流になるから、武器は剣や槍の様な手に持つモノだけじゃなく足や肘なんかに仕込む場合もあるし、変則的な攻撃を出す訓練も受ける訓練もやってく。戦争なんかでそんなことしてたら不利になるだけだが、一対一のこの状況じゃあ面白くなるかも知れねえ」

「じゃあ、サリファス君が有利になる局面も．．．」

「馬鹿バツカ！ あのサリファスがそこまでやるって事は、そこまでしなきゃ勝ち目が見えないって事だろうが．．．」  
不利なのは変わらないらしい。

「元々サリファスは剣にしる槍にしる天性のモノを持つてるから、返つてあんな戦い方はしねえんだよ、普通に戦つたほうが強ええんだよ、でもそれじゃあラーズのボケには勝てねえから無理にああ言つた戦い方で挑発までして隙を作ろうとしてるが」チツ、流石だぜ。  
とアルバートさんの視線を追うと、サリファス君の盾がラーズさんに飛ばされる処が見えた。

「青いぜ、俺と戦うにはちいと早すぎたか？」ラーズさんは勝負が決まったと言つた感じでゆっくりサリファス君に近づいていく。

「ラーズ！」サリファス君は剣を両手で持つて打ちかかるも「駄目だ．．．見切られてる」アルバートさんの言うとおり、ラーズさんタイムマンが簡単に避けて剣の柄をサリファス君に叩き込んで．．．一騎討ちは終わった。

幻影の歓声と 紅蓮の悲痛な呻きの中、ラーズさんがこつちに近づいてくる。

「アルバートよあ、オメーが落ちつかねえから、ガキ共の尻拭いに駆り出されちまったぜ？」

どうやらアルバートさんに声を掛けに来たみたいだが、何故か視線は僕の方に向いている。

「そいつが今回の……え？ 僕？

サリファス君さえ簡単に下したラーズさんの視線に硬直すると「オウ！ こいつが 紅蓮ウチの魔術師のエリン坊やだぜ？」アルバートさんが答えてくれた。

ラーズさんの視線が恐い……いや、それより坊やは止めて欲しい、かな？ なんて……

「覚えておくぜ」と言っただけで去って行くラーズさんだが、正直忘れ去って欲しい、僕の事など。

ラーズさんが去って行ったので 幻影の人達も続いて居なくなっってしまった。

サリファス君は神官戦士達に介抱されて意識を取り戻した。

「アルバートさん、ごめん。負けちまったよ」

「ラーズ相手なら仕方ねえべ、お前は良くやったよ」

「まだまだ……だよな、俺も」サリファス君は独りごちるが、アルバートさんはサリファス君の肩を叩いて「ま、後2年もすればラーズつくれえ簡単に抜かせるさ、お前ならな」

「でも卑怯っスよ！ 幻影ナマクラの奴らあ！ ラーズつつつたらアルバートさんと同期で……」ブレイブ君達はまだ納得いかないみたいだけ。

「もう終わった事だ。 それにもし一騎討ちタイムンでウチが勝ってたら流石にマズい事になってたかも知れん。 ウチも勝ちには行ってたが、それ以上に 幻影ナマクラの奴等にとつては落とせない勝負だったって事だ」

アルバートさんの言葉でとりあえず落ち着いたのでここは解散となった。

突発的な一騎討ち騒ぎタイムンの後、僕はメイガスさんの部屋に入って行った。

騎士団に入ってから僕は基本的にメイガスさんにいろいろな魔法を教わっているので、今日もメイガスさんの部屋で修行に励む予定なのだ。

すると何故かそこにはウェインさんも来ていた。

ウェインさんとは最初の日に挨拶をした位なのだが、僕が部屋に入ったときからこちらを睨んでるという事は僕に用があつて来たのだろう。

「エリン・・・と言ったか。 どういうつもりだ？ 団に入つて3日もせぬうちに問題を起こしおつて」

「す、すいません」

「どういうつもりかと聞いている！ だいたい貴様は判っているのか？ 各騎士団の従士同士が仲が悪く小競り合いが続いているのは、国境に接しない リープス侯爵領 で騎士や従士達の緊張感を保つ為の擬似戦闘訓練の一環になっていると言う事を！」

なるほど、同じ領内の騎士団同士、何故こんなに仲違いしているのかと思えば擬似訓練の為にわざと仲違いさせている面もあるのか。

「これだから物事を理解出来ない平民は・・・」等とやはり選民意識の高そうなウェインさんは、何より僕の事がお気に召さないらしい。

「いいか！　あまり問題を起こす様なら追放処分もありえると思えよ！」

言うだけ言うとウェインさんは部屋から出て行った。

僕のゴタゴタはまだ続くらしい。

## 第四話

ウェインさんが出て行った後、残ったメイガスさんは笑いながら慰めてくれた。

「ハツハツハ、気にする事はありませんよ、エリン君」

でもウェインさんは追放処分まであるって言ってたし。

「あれはね、嫉妬なんですよ」

「どういうことですか？」

「例えば今回の件ですが、君は16人に対して加速ハイストの魔術を3分弱使ったと聞いています。正直な話私では16人を対象にすれば2分持たないでしょう。あの魔術はもつと少人数を想定して使うものです」

「え、でも、それじゃあ戦争ほんほんでは使い物にならないんじゃない？あ．．．」

「あの魔術を使う時の本番ほんほんは戦争ではなく魔獣退治です」

あ、そういえば 紅蓮 はそっちのエキスパートだった。

「騎士団が出撃する程の魔獣退治は街の冒険者達で対応しきれないような魔獣が対象となりますが、通常は対処しきれない程の大規模な群れか、少数ながらに強力な能力ちからを持つ魔獣かの2択になります。

群れの場合はこちらも数で勝負しますが、相手が少数の強力な魔獣の場合は下手に人数を出すと被害ばかりが増えるので、こちらも少数の人数に加速等ハイストの強力な術で強化して戦う事になります」

たしかに魔獣に限らず野生の動物などでも人間の反応速度よりよほど早く動くことができる。

訓練された騎士と言っても強力な魔獣を相手取るには身体能力を強化する魔術を使用して漸く互角の勝負ができるのだらう。

「加速ハイストの魔術は非常に強力ですが、それだけに高い魔力を要求されます。はつきり言ってウェインでは加速ハイストを使う事は出来ないでしょう」

「確かに加速は魔力をすごく使う魔術だとは思いますが．．．」

「君は中央の魔法学校出でしたよね。　だったら今まで同レベルの人達に囲まれていたのでしょうから、判り難いかもかもしれませんね」  
「そう言うものだろうか。」

「魔法学校も基本的に貴族や魔術師の子弟でなければ入る事が出来ませんから、リース一族とはいえ端の方であるウェインでは然程優遇される訳もなく門前払いだったと言う話です。　逆に平民出身の君が入学出来たと言う事は余程優れた素質が有ったと言っているでしょう。　現に入団早々に結果を出しているわけですが」  
「なるほど、その辺にもウェインさんが僕に辛く当る原因がありそう  
だ。」

「まあ、かく言う私も魔法学校へは行ってないのですが、もう少し若ければ君に嫉妬していたかもしれませんね」  
「メイガスさんはウェインさんとは大分タイプが違うと思うが．．．」

「それに今回の事件自体、その辺りが原因なのですよ」  
「え、どういう事ですか？」

「戦時中ならば兎も角、平時の今はあまり魔術師の補充はありません。　実際、今は私たちの仕事は文官と一緒に事務方の仕事をするだけです。　ウェインも言っていました。　若し連中のやる衝突はあくまでも訓練という名目ですから、命の取り合いにまでは到らないように年長の騎士達が調整しています。　勿論、訓練中の事故による死亡もない訳ではありませんが、我々魔術師が訓練に参加すると事故の確率が飛躍的に上がります。　まあ、エリン君が来るまでは　紅蓮　に訓練に参加するような若い魔術師は居ませんでした。　」

「すみません、参加してしまいました．．．」  
「つまり我々は現状、閑職に付いているわけです。　そうやって来

ると実際に魔術の腕は未熟でもステータスを上げる為だけに騎士団付魔術師になる者も出ます」

「そうなんですか？」

「はい。貴族が一人前と認められるには、特に跡取りの長子などは武官か文官としてそれなりの実績を積む必要があります。勿論、無くても跡を継がない訳ではありませんが、周りの目を考えると．．．ね」

「それで、どの辺りが今回の件に絡んでくるのでしょうか」

「そうでしたね。実は2年ほど前に幻影に魔術師の補充があったのですが、当にそういったタイプの魔術師らしくて．．．まあ、流石に表だって使えないのが来たとは他の騎士団に言えませんが、そう言った噂は耳に入りますからね」

つまり、自分達の騎士団はババを引いたのに紅蓮は魔法学校の卒業生をゲットした．．．と言っただろうか。

「ウェインは才能に乏しいとはいえ本気で魔術師としてがんばってますが、件の魔術師は従者として騎士団に入ってコツコツと下積みするのが嫌で、てっとり早く騎士と同格の称号を得る為に騎士団付魔術師になったと聞きます。最低限の才能と貴族のコネで腰掛けとして入られたのでは幻影も堪ったものではありませんよね」

でも、その堪ったものをこっちに向けないで欲しかった。

それよりメイガスさんの中でウェインさんの扱いが何気に酷い件．．．

実際、魔術師の間では身分の上下より魔術師としての実力で上下が決まる処があるからの反応だろうが。

「だいたいそんな似非魔術師<sup>エセ</sup>の実力を基準に判断するから、幻影は倍の人数を繰り出しておきながら負けるようなハメになるのです。魔術師を無礼<sup>ナメ</sup>ている証拠ですな」

「倍の人数では足りなかったと言うことですか？」

「そうではありません。相手が補助魔術の影響化にいると判っておきながら、戦いの趨勢が決まるまで魔術師を放置しておいたことが甘いと言っているのです」

確かにあの時僕に攻撃を集中されたら、例え無力化されるに到らなかったとしても、集中力を乱されて魔術が切れていた可能性は高い。「まあ、次回からは 幻影 も魔術師を最初に無効化する事を考えるでしょうから、良い教訓になったと言えるでしょう」

それって真っ先に僕が狙われるって事じゃあ・・・

「何を言っているのです。流石にまた参戦する様な事になれば怒られますよ」  
「そうでした。」

「まあ、今回に関しては先ほども言った様に、非常に良い経験になったと言う事で、双方の騎士団共に上の方は喜んでいることでしょう」

現状は閑職だとメイガスさんが言っていた様に、魔術師が出勤することは殆ど無いらしい。

必然、若手の騎士や従士達に役立たず扱いされかけていた魔術師たちは溜飲を下げているとの事だ。

取り敢えず今回の件は治まったみたいだが、色々と根深そうな問題がメイガスさんの言動から垣間見る事ができた。

ホント勘弁してください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8974f/>

---

騎士団付魔術師のお話

2010年10月28日05時50分発行